

清代八股文における起講の作成法について (1)

滝 野 邦 雄

はじめに

清代八股文の起講については、すでに「清代八股文における起講について」(『経済理論』第313号・p39～p72・2003年5月:以下、「前稿」とする)において、不十分ながら考察を行なった。ただ前稿は、資料の制約のため簡略な検討しか行なうことができなかった。そこで、ここで新たに目撃することができた資料を用いて、改めて清代八股文の起講の作成法についての考察を行ないたい。

起講は、

破題・承題・起講・入題・提股・出題・中股・後股・收股(乾隆丙戌[一七六六年]刊『文家模範』による)。

と分類される、八股文の破題・承題に続く部分にあたる。

本稿では、清代に出版された起講について解説がなされている文法書をほぼ時代順に並べ、その内容をそこで例示される用例とともに検討して、起講の作成方法について考えるつもりである。

(1) 『芹宮新譜』

江蘇靖江縣の鄭一鵬の『芹宮新譜』(雍正三年[一七二五]序)では、まず起講の作成法を述べ、続いて「明擒」・「暗擒」・「借擒」・「點染映合」・「對面擒」・「高低擒」の解法からどのように起講を書くかを解説する。

論起講

起講とは、一篇の冠冕なり。人の一身に譬えれば、四體 未だ露^{あら}われざるに、元首 先ず^{あら}呈^{あら}われるなり。若し五官端好(顔立ちが整う)にして、氣色(容貌)鮮明(美しい)なれば、見る者、先ず幾分かの歡喜(好ましい)の意思有り。倘し元首 醜惡^もなれば、下を以て縦^{たと}え好き處有るも、看來るに先ず耐煩(辛抱強く)せず。故に場屋中の起講は、極意(心をつくす)して經營(工夫する)せざる可からず。大約 近きは偏なる可からず、遠きは迂なる可からず。短なるは促なる可からず。長なるは盡す可からず。〔題目

に截去された] 上文有る者は、須く上文より念來すべし。[起講の] 起句は、却って脱口（意を尽くして言葉にする）を好む。[題目に截去された] 下文有る者は、須く下文に向かいて理會すべし。落筆して煞^{しめく}るに開照（きわめてはつきりさせる）有り。此の如くすれば方に走作（規範からはずれる）せず。先輩の起講は、多く語に着かず、而して題意 自ずから透なり。然れども未だ枯寂を免れず、恐らくは時眼（要求される基準）に入らず。故に余（鄭一鵬） 運筆の鬆にして擒題の緊（適切）なる者を作爲して、分かちて六則と爲す。學ぶ者をして取裁（選び取る）する所を知らしむ、云う（『芹宮新譜』上卷・「論起講」条・七葉）。

起講は、文の頭を飾る部分である。人間の体に譬えるならば、手足が出る前に顔を見せるようなものである。もしも顔立ちが整っていて、容貌が美しければ、見た人はまず幾ばくかの好ましい気持ちを感じる。もしも顔が醜悪であれば、下の部分がたとえすぐれたところがあったとしても辛抱強く下のところまで看ようとはしない。したがって受験する時に書く起講は、心をつくして工夫しなければならない。だいたい、題目に近づきすぎて密着してはならないし、離れすぎて迂遠になってもいけない。文は短くして題目に密着し過ぎてもいけないし、長くして題目を言い尽くしてはいけない。題目に截去された上文があれば、その上文から考え来るべきである。起講の最初は、意を尽くして言葉にするのが好まれる。題目に截去された下文があれば、その下文をも含めて理解すべきである。書き始めからしめくくりまで、きわめてはつきりとさせる。そのようにすれば、規範からはずれて放逸とならない。先人たちの起講は、題目の言葉に密着せずに、題目の意味をおのずとはつきりさせている。しかしそれでは物寂しさを免れないし、要求されるような基準に達しない。そこで私は、書き方が緩やかで題目を適切に捉えている例文を六つに分類して作成し、学ぼうとする人たちに選び取るものを示した、という。

①明擒

開門見山（最初から直ちに本題に入る）・一矢もて^{まと}的^{うが}を破つ[といった解法である。したがって]、最も入殻（ごうかく）し易し。故に「明擒」を以て第一と爲す（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・八葉）。

明擒とは、最初から直ちに本題に入ったり、一矢で的を穿つような解法である。この解法を用いると、最も合格しやすい。したがって「明擒」の解法を最初に置く。

[用例]

◎「學而時習之」（『論語』學而）の起に云う；

今夫運而不息者時也、時貫于終身、未嘗偶間于俄頃、學者以作輟之功、肆身心之業、吾恐始基不立、而後此之精進無由、何以謂之能學

(今夫れ^{めぐ}運りて息まざる者は時なり、時は終身を貫く、未だ嘗(嘗)^{たま}て偶々の俄頃(片時)^{へだて}に間られず、學ぶ者は^や輟めるを作すの功(功夫)を以て、身心の業を^{ほしいま}肆にす。[しかし]吾 始基の立たず、而して後に此れ之れ精進の由る無きを恐る、何を以て之を能く學ぶと謂うや)

凡そ題中の字眼は各々緊要の處有り。開口は即ち宜しく擒定すべし。此の句の如きは重んずる所は「時」字に在り。惟だ學者のみ熟せり、故に中心喜悅す。「時」字は乃ち「悦」字の根なり。開手(はじめに)に「學」・「習」字を^{とら}擒えるは、未だ嘗て不可ならず。但だ題の要害(要所)に非ず。落紙(書きはじめる)すれば、便ち警策(目を醒まさせるような字句)ならず。此れ獨り^{にわ}陡かに「時」字を^{とら}擒え、^{かえ}倒って「學」字を煞(倒してしめくくる)す。此れ惟だ壁壘(境界)を一新するのみならず、一節一章の精神 俱に動く。此れ善く輕重の處を審にするなり(『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・八葉)。

◎「主忠信」(『論語』學而)の起に云う；

且夫心者、身之主也、顧心爲一身之主、又必有主宰于此心者、而所存・所發始能内外而一致、吾故于重威固學外、而語人以存誠之學

(且^{そも}も夫れ心なる者は、身の主なり、顧だ心は一身の主と爲り、又た必ず此の心を主宰する者有り、而して存する所・發する所は始めて能く内外にして一致す、吾 故に「重」・「威」・「固」・「學」の外に于いて、人に^う語ぐるに存誠の學を以てす)

①裁去された題目の上文に「子曰、君子不重則不威、學則不固(子 曰く、君子 重からざれば則ち威あらず、學べば則ち固からず)」。

②題目の「主忠信」の朱注に「……程子曰、人道惟在忠信、不誠則無物(程子 曰く、人道た惟だ忠信に在り、誠ならざれば則ち物し)……」。

「時」字を明擒し、「忠信」を暗拍す。簡淨不支(『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・八葉)。

◎「王孫賈問曰」(『論語』八佾)の起に云う；

且人心有所疑、斯假諸問以道之、顧天下有不知而問者、有明知而問者、不知而問其情眞、明知而問其意險、蓋以生平所熟諳之術、而故托爲迷謬之詞、卽一矢口間、而早已窺之、如王孫賈是也

(且^{そも}も人心に疑う所有り、斯れ諸を問うに^か假りて以て之を^い道う、顧だ天下に知らずして問う者有り、明らかに知りて問う者有り、知らずして問うは其の情 眞なり、明らかに知りて問うは其の意の險(はらぐろ)し、蓋し生平 熟諳(熟知)する所の術(手段)を以て、故さらに托して迷謬(迷わせ誤らせる)の詞を爲す、卽ち一つの矢口(口を開く)の間に、^す早已に之を窺わしむ、王孫賈が如きは是れなり)

[王孫] 賈 早に成見(もとからの考え)有り。[なのに] 特に此の二語に假り、以て孔

子を隱諷す。此れ小人の忌憚する所無し。小講 下意に會し、以て立言し、却って能く本位を溢れさせず（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・九葉）。

◎廖瀛海先生の「父母之年」（『論語』里仁）の起に云う；

嘗思造物予人以生，即予人以年是年者，造物之所藉以警人者也，故忽而壯，忽而老，^①曾日月之幾何，忽久已爲人父母也，則歷年爲已多矣，吾是以欲有以警人子，而還爲人子計父母焉

（嘗て思うに造物（萬物を創造するもの）は人に^{あた}予うるに生を以てす，即ち人に^{あた}予うるに年を以てす，是の年なる者は，造物の^か藉り以て人を^{いまし}警むる所の者なり，故に忽ちに^{すなわ}て壯となり，忽にして老ゆ，^い曾ち日月の幾何，^{いくばく}忽ち久しくして已に人の父母と爲るなり，則ち年を^ふ歷ること已に多しと爲す，吾 ^こ是を以て人の子を^{いまし}警むるを以て，而して還って人の子の爲に父母を計ること有らんと欲す）

①曾：又た不料（思いもよらない）の辭なり。「曾由與求之間（^{すなわ}曾ち由と求とを之に問う）」（『論語』先進）・「爾何曾比予於是（^{なんじ}爾 何ぞ^{すなわ}曾ち予を^{われ}是れに比するや）」（『孟子』公孫丑上）の類の如し（『舉業辨字』櫛語辭第四・三十葉・「曾」条）。

②歷年爲已多：『孟子』萬章上に「……舜之相堯，禹之相舜，歷年多，施澤於民久（舜の堯に^{しょう}相たり，禹の舜に^{しょう}相たるや，年を^ふ歷ること多く，[恩]澤を民に施すこと久し）……」。

用筆 別致（別の趣き）有り（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・九葉）。

◎「非其罪也」（『論語』公冶長）の起に云う；

且五刑之屬三千，^①而其罪皆由于自取，世有多行不義，而漏于法網者，君子謂之倖免，而罪必歸之，所以著其寔也，有終身無過，而陷于國法者，君子謂之無妄，而罪不加焉，所以原其情也

（^{そも}且そも五刑の屬三千，而して其の罪 皆な自取（みずから招く）に由る，世 多く不義を行ないて法網を漏れる者有り，君子 之を倖免と謂う，而して罪 必ず之に歸す，其の寔（實）を著わす所以なり，終身^{あやま}過つ無くして國法に陷いる者有り，君子 之を無妄と謂う，而して罪 加えず，其の情を^{たず}原ぬる所以なり）

①五刑之屬三千：『孝經』五刑章に「子曰，五刑之屬三千，而罪莫大於不孝（予 曰く，五刑の屬三千，而して罪 不孝より大なるは莫し）……」。

開手（はじめ）に「題目の」「其罪」を緊拈（せまってつまみとる）して上文を截清（はつきりさせる）す。開合^①を用い以て展局し，拘攣（拘束）^{やぶ}を破る可し（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・九葉～十葉）。

①開合：『制義綱目』に，「此の意を明らかにせんと欲し，先ず彼の意に即して以て之を發するを開と曰う。に彼の意を明らかにし，忽ち前の意に接し以て之を印するを合（閣）と曰う」（雍正六

年刊『制義綱目』不分卷・題氣總論・「十日開合」条・二十九葉。

◎「女奚不曰其爲人也」(『論語』述而)の起に云う；

且夫人生平而有不可告人之隱^①，則其爲人亦大可疑矣，蓋事可獨信于一己，即可共証于同人，倘謂悠悠斯世，不足與言^②，則我豈真有異人之爲，不可明指以相告耶

(且そも夫れ人 生平(もと)よりして人に告ぐ可からざるの隱有れば，則ち其のひと爲りや亦た大いに疑う可し，蓋し事 獨り一己を信にす可し，[そうなれば]即ち共に人と同じきを証す可し，倘し悠悠たる斯の世は與に言うに足らずと謂えば，則ち我 豈れ眞に人に異なるの[行]爲有りて，明指して以て相い告ぐる可からざらん)

①人之隱：『論語』先進に「子曰、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾、吾無行而不與二三子者、是丘也(子曰く、二三子 我を以て隱すと爲すか、吾 隱す無し、吾 行いて二三子と與にせざる者無し、是れ丘なり)」。

②截去された上文に「葉公問孔子於子路、子路不對(葉公 孔子を子路に問う、子路 對えず)」とあり、朱注に「葉公不知孔子，必有非所問而問者，故子路不對，抑亦以聖人之德，實有未易名言者歟(葉公 孔子を知らず，必ず問う所に非ずして問う者有り，故に子路 對えず。抑そも亦た以聖人の德，實に未だ名言し易からざる者有を以てなるか)」。

反正の處は皆な能く題[目]を留む(『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十葉)。

◎秦大來先生の闡墨の「仰之彌高」(『論語』子罕)の起に云う；

上達者聖人也，下學者學人也，得聖人而師之，有不知其道之高者哉，顧聖人日上，學者處其下焉，學者亦日上，聖人又處其上焉，則聖道之高非猶夫人之高也

(上達する者は聖人なり，下學する者は學ぶ人なり，聖人を得て之を師とす，其の道の高きを知らざる者有らんや，顧だ聖人日々上り，學ぶ者は，其の下に處る，學ぶ者は亦た日々上るも，聖人 又た其の上に處る，則ち聖道の高きこと，猶お夫れ人の高きがごときに非ざるなり)

①上達者聖人也，下學者學人也：『論語』憲問に「……子曰，不怨天，不尤人，下學而上達，知我者其天乎(子曰く，天を怨みず，人を尤めず，下學して上達す，我を知る者は其れ天か)」。

「彌」字を取りて雋妙(意味深長)・絶倫(比類なし)なり(『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十葉)。

◎亦た「祇以異」(『論語』顔淵)の起に云う；

立異爲高非君子所尚也，然君子不求異人，而人自異乎君子，則于舉世皆同之日，不得不指君子爲異，而寔非君子之好爲異也，亦以世之求富者衆耳

(異を立てて高しと爲すは君子の尚とぶ所^{とお}に非ざるなり，然らば君子は異を人に求めず，

而れども人 自から君子に異なれば、則ち世を擧げて皆な同じくするの日、君子を指して異なれりと爲さざるを得ず、而れども寔^{まこと}に君子の好みて異を爲に非ざるなり、亦た世の富を求むる者の衆きを以てなるのみ)

「異」字を緊擒(せまってとらえる)し、「富」字を収出す。用筆 矯変(変化)あるなり(『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十葉～十一葉)。

◎「孟公綽爲趙魏老則優」(『論語』憲問)の起に云う；

用人者、亦用其所優而已矣、其人而無所不優者、斯可隨用而皆當、若夫綜核其人之生平、而其所優者、有獨著之地、則用人者正當先視其人矣

(人を用うる者は、亦た其の優(餘り有ること)なる所を用うるのみ、其の人にして優(餘り有ること)ならざる所無き者は、斯れ隨い用以て皆な當^{あた}たる可し、若し夫れ其の人の生平を綜核し、而して其の優(餘り有ること)なる所の者は、獨り著わるる地有れば、則ち人を用うる者は正に當に先ず其の人を視るべし)

①所優：題目の朱注に「優、有餘也(優は、餘り有るなり)」。

「優」字を拈^{つまみと}りて起こす、下意を吞吐(はっきりさせたり隠したりするような変化を行なう)し神を得。全語 之を半ばにするの訣なり(『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十一葉)。

◎「固相師之道也」(『論語』衛靈公)の起に云う；

夫子因子張之問而言曰、「道」。體事而無不在者也、在人^に有當然之則、在我有一定之理、惟我因物以付物、斯可以人而治人、微子言吾幾日習而忘之也

(夫子 子張の間に因りて言いて「道なり」と曰うは、事を體して在らざること無き者なり、人に在りて當然の則有り、我に在りては一定の理有り、惟だ我は物に因りて以て物に付す、斯れ人を以て人を治む可し、微^{かす}かなる子の言は、吾 日々習いて之を忘るるに幾きなり)

子張 「師と云うの道か」と謂うは、則ち涉りて意有り、夫子 「固^{まこと}に師^{たす}を相くの道なり」と曰うは、則ち無心に出ず^①。蓋し子張 問わず、夫子も亦た提起せず、忽然と問及すれば、則ち隨口に答應す、並びに大驚小怪(なんでもないことを大げさに騒ぎ立てる)ならずや。妙處は全く一の「固」字に在り。講中 却って能く傳え作す(『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十一葉)。

①『四書講義困勉錄』卷十八・論語・「師冕見節」条に引く徐自溟の解説に「徐自溟曰、子張曰 與師言之道、則涉有意、子曰固相師之道、則率於無心(徐自溟 曰く、子張 「師と云うの道か」と曰うは、則ち涉りて意有り、夫子 「固^{まこと}に師^{たす}を相くの道なり」と曰うは、則ち無心^{したが}に率う)……」。

②暗擒

暗擒とは、題面を擒えず題意を擒う。題の神情（表情）・義理をして紙上に呈露し、閱る者をして一望にして知らしむれば、其の題を爲すに便ち上乘と爲す。若し昏昏（すっきりしない）悶悶（煩悶）として題目を掩却し、竟に些かの什麼^{どのよう}な話（事柄）なるかを説くを知らざれば、便ち尺寸三分に屬し、萬に命中の理無し。先輩の起講は、多く明を用いず暗を用いるに類す。明を以てすれば則ち筋骨（文の構成）を露し易く、暗もてすれば則ち高渾（巧みで雄渾）の迹無きなり。然れども所謂ゆる暗なる者は、但だ本題の字面を露わさざるのみ。其の顯豁透闢（徹底して深くする）なるは、又た未だ嘗て明擒なる者と同一の目を醒まさずんばあらざるなり（『芹宮新譜』上卷・「暗擒」条・十一葉～十二葉）。

暗擒は、題面ではなく、題意をとらえる。題目の表情・義理を紙上にはっきりさせ、読者に一目でわからせるならば、その題目の八股文としての最上のものとなる。もしもすっきりとせずに悶々として、題目を覆い尽くしてしまい、ついにはどのような事柄を説明するのが分からなくなってしまうと、尺寸（わずかな部分）の三分（三分の一）となり、万に一つの合格の可能性もない。先輩たちの起講は、「明擒」を用いず「暗擒」を用いるようである。「明擒」であれば文の構成をはっきりとしてしまいがちであり、「暗擒」であれば巧みで雄渾の痕跡はない。しかし、いわゆる「暗」というのは、題目の字面をはっきりさせないだけである。その徹底して深くすることは、常に「明擒」と同じように必ず目を醒まさせるものである。

〔用例〕

◎「汎愛衆而親仁」（『論語』學而）の起に云う；

且斯人之相與惟其情而已矣^①、故少年之患在于無情、無情則視天下無一可用吾情之人、而澆漓之習以長、又莫患于多情、多情則視天下無一不當用吾情之人、而決擇之明不生、惟教弟子者、俾之有情而善用其情則二者之患均絶矣

（且^{そも}そも斯れ人の相い與にするは惟だ其の情^{まこと}なるのみ、故に少き年^{うれ}の患いは無情^{まこと}（情無し）に在り、無情^{まこと}（情無し）なれば則ち天下 一として吾が情^{まこと}を用いる可きの人無きを視て、而して澆漓（薄情）の習 以て長ず、又た多情^{うれ}を患うる莫し、多情なれば則ち天下 一として當に吾が情^{まこと}を用いる可からざるの人無きを視て、而して決擇（選択）の明 生ぜず、惟だ弟子に教うる者、之をして情有^{うれ}りて而して善く其の情を用いしむれば則ち二者の患い 均しく絶つ）

①而已矣：収轉して此に到り、文義 盡し絶つの辭なり（『舉業辨字』歇語辭第七・三十五葉・「而已矣」条）。

一の「情」字^{つまみと}を括りて兩句を管轄す。既に融洽し、又た分明なり。閱る者をして心目爽然たらしむ（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十二葉）。

◎「無友不如己，[過則勿憚改]」二句（『論語』學而）の起に云う；

夫子論爲學之要，既以主敬序誠立其大矣，而復究而言之曰，君子之學内外兼修者，復人已兼盡，故在人者，宜求其有餘，在己者勿護其不足，而苟且因循之弊，往往而絶焉（夫子 爲學の要を論じ，既に「忠信を主とす」と述べて）主敬を以て誠を序（順序だてて）て其の大を立つ，而して復た究めて之を言いて曰く，君子の學は内外兼ね修む者なり，復た人・己 兼ね盡す，と，故に人に在る者（他人）は，宜しく其の餘り有るを求むべし，己に在る者（自分）は其の足らざるを護うこと勿れ，而して苟且因循（なおざりでいいかげんにする）の弊，往往（いたる所）に絶つ

①以主敬序誠：題目から截去された上文の「主忠信」条の朱注に「程子曰人道惟在忠信不誠則無物（程子曰く，人道は惟だ忠信（誠実であること）に在り。誠ならざれば則ち物無し）……」。

[前の用例の]「愛衆親仁」は是れ一項の事なり。故に「情」字を拈りて以て兩句を貼合す可し。[この題目の二句の]「友を擇ぶ」・「過ちを改む」の若きは，意 相い蒙らず。牽合（仲介して取りまとめる）すれば則ち硬（硬くてぎこちない）になり易く，分貼（分けて補足する）すれば又た呆（融通がきかない）に渉る。此れ「人」・「己」二字を拈りて線分を作り，而して合体する有り。文氣 亦た高渾（たかく雄大）なり（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十二葉～十三葉）。

◎「君子之至于斯也」（『論語』八佾）の起に云う；

風塵下吏，原不敢相天下士，但地當天下之衝，易致賢豪之駕，則爾時之驅車而過我者至，今猶歷歷在我意中也

（風塵（官界）の下吏 原より敢て天下の士を相（観察）せず，但だ地 天下の衝に當れば，賢豪（賢士豪傑）の駕を致し易し，則ち爾の時に車を驅りて我を過ぐる者至る，今猶お歴歷（ありありとする）として我が意中に在るがごときなり）

此の題の最も忌く所の者は，開口（最初）に「夫（君）子之至于斯」の「朱」注を將つて破くなり。[それでは] 便了（残念ながら）意味無し。「封人」は當に何等の語の妙を下すべけんや。徑行直説（思いのままにそのまま言う）するが若きは，反って此の一番の宛轉（婉曲）たるを多くするを覺ゆ。然らば又た呆説（ぼんやりと述べる）し得ず。此の「例文の」開口（最初）に夫子に見ゆるを求むの意を將つて反って一筆に托し，微かに下意を逗（引き起こす）す。即ち急ぎ本題を抱きて「之」・「于」・「也」字の神情（表情）を收出す。[しかし] 題位（題目の要求）を溢れさせず。落筆（筆を下す）するに極めて体認（体得）する有り（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十三葉）。

①「夫（君）子之至于斯」注：朱注に「儀，衛邑。封人，掌封疆之官。蓋賢而隱於下位者也。君子，謂當時賢者。至此皆得見之，自言其平日不見絶於賢者，而求以自通也（儀とは，衛の邑。封人と

は、封疆（国境管理）を掌る^{つかさど}の官なり。蓋し賢にして下位に隠るる者なり。君子とは、當時の賢者を謂う。此に至れば皆な之に見ゆる^{まみ}を得たりとは、自から其の平日賢者に絶たれざるを言いて、以て自から通ずるを求むるなり）……」。

◎邢退菴の「其愚不可及也」（『論語』公冶長）の起に云う；

且夫知其事之有成而爲之，與不知其事之有成而爲之，其誠僞必有辨也，爲之而不必其有成，與爲之而能必其有成，其能否又必有辨也，知此乃可與論寧武子之愚（且そも夫れ其の事の成る有るを知りて之を爲すと、其の事の成る有るを知らずして之を爲すとは、其の誠僞（真誠と虚偽）必ず辨（区別）有るなり、之て爲して必ずしも其の成る有らずと、之を爲して必ず其の成る有るを能くすとは、其の能否 又た必ず辨（区別）有るなり、此れを知れば乃ち與^{とも}に寧武子の愚を論ず可し）

大註の兩層の意^①を照して空に凌^{のぼ}り、及ぶ可からざるの神理を吸取し、平衍（文章の単調で平板な様子）の疾を破る可し（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十三葉～十四葉）。

①大註兩層意：朱注に「寧武子，衛大夫，名俞。按春秋傳，〔寧〕武子仕衛，當文公・成公之時。

文公有道，而〔寧〕武子無事可見。此其知之可及也。成公無道，至於失國，而〔寧〕武子周旋其間，盡心竭力，不避艱險，凡其所處，皆知巧之士，所深避而不肯爲者，而能卒保其身，以濟其君，此其愚之不可及也（寧武子は，衛の大夫，名は俞なり。『春秋傳』を按ずるに，〔寧〕武子の衛に仕うるは，文公・成公の時に當る。文公 有道にして，〔寧〕武子 事の見る可き無し。此れ其の知の及ぶ可きなり。成公 無道にして，國を失うに至る。而して〔寧〕武子 其の間に周旋し，心を盡し力を竭し，艱險を避けず。凡そ其の處する所は，皆な知巧の士の，深く避けて爲すを肯ぜざる所の者にして，能く卒^{つい}に其の身を保ち，以て其の君を濟^{すく}う，此れ其の愚の及ぶ可からざるなり）」。

◎「伯夷叔齊何人也」（『論語』述而）の起に云う；

事有無端而相感，人或異世以相求，渺渺予懷固^①有不能釋然者，而今乃有以折其義矣（事 無端（わけもなく）にして相い感ずる有り，人 或いは世を異にして以て相い求む，渺渺たる予れ 固より釋然とする能わざる者有るを懷^{おも}う，而して今乃ち以て其の義を折すこと有り）

①予懷：『中庸』第三十三章第六節に「詩云，予懷明德不大聲以色（詩（『詩經』大雅・皇矣）に云う，予れ明德^わを懷^{おも}う，聲と色とを大にせず）……」。

子貢の一問は殊に着〔手〕し難きなり。筆 此を得て乃ち神情（表情）の畢透（すべてはつきりする）するを覺ゆ（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十四葉）。

◎「『子不語』（『論語』述而）題」

院試に「子不語」（『論語』述而）題を出せば、場中 俱に「夫子 言わず」と説くの文は佳しとし難く取らず、凡そ「語」字に切（切迫）して起こす者は場屋に一空（少しもない）なり。蓋し「自ら言うを「言」と曰い、答述するを「語」と曰う」と。[それは]郷黨の章に明文有^①り。下文の四項（怪・力・亂・神）は、獨り夫子 言わざるのみならず、即ち問う者有るも亦た答えず、即ち耳聞に屬して亦た説かず。聖人の一段の深意 全く此に在り。何ぞ「語」を混^まぜて「言」に作るを得んや。一の起に云う

且天下事之不可自我而啟其端者、不獨一人不可倡（且そも天下の事の我よりして其の端^{ひら}を啟く可からざる者は、獨り一人の倡う可からざるにあらず）。

其の説くは即ち「問」に因りて答へと爲し「述」を轉じて相い告ぐ、防微杜漸（災いが大きくならないうちに防ぐ）の深心に非ざれば、子の「不語」（『論語』述而）する所有るを觀ざらんや。文章の訣 全く「切」に在り。凡ての題〔目〕皆な然り。此れに由りて之を類推すれば可なり（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十四葉～十五葉）。

①『論語』郷黨の「食不語、寢不言（食するに語らず、寝ぬるに言わず）」条の朱注に「答述曰語、自言曰言（答述するを「語」と曰い、自ら言うを「言」と曰う）」。

◎「與其不孫也寧固」（『論語』述而の起に云う；

今夫兩利俱存、擇其尤利、兩害相權、去其尤害、此固維世之深心、要亦吾人之不得已也（今夫れ兩つの利 俱に存すれば、其の尤も利なるを擇ぶ、兩つの害 相い^{はか}權れば、其の尤も害なるを去る、此れ固より世を維〔持〕するの深心（用心）なり、要は亦た吾人の已むを得ざるなり）

空中に「與其」・「寧」字の神を擊取す。用筆 超拔（出色）なり（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十五葉）。

◎「君子何患于無兄弟也」（『論語』顔淵）の起に云う；

天倫之際、君子原無可解于心、然事當無可如何之際、而能克盡其在我、則不可解而亦有可解者、徒切切焉無益也

（天倫（『穀梁傳』隱公元年：兄弟、天倫也）の際、君子 原より心^{ときあか}を解す可きは無し、然れども事 如何ともす可きこと無しの際に當りて、能く其の我に在るを克盡（全力で尽くす）すれば、則ち^{ときあか}解す可からずして亦た^{ときあか}解す可き者有り、徒だ切切焉（懇切で行き届く）として益無らんか）

恰かも^{ただち}當下に〔司馬〕牛の憂の意を寛くするを得（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十五葉）。

◎「莫我知也夫」（『論語』憲問）の起に云う；

夫人自信于生平，豈不可共明于斯世，乃此心甘苦之數有不能爲他人道者，人情相視而不相知，何必不在師弟間耶

(夫れ人 自から生平を信ずれば，豈に共に斯の世に明らかになる可からざらんや，乃ち此の心の甘苦の數 他人の爲に道う能わざる者有り，人情 相い視るも相い知らず，何ぞ必ずしも師弟の間に在らざるをや)

極めて大註の「[夫子] 自嘆以發，子貢之問」の意を得たり。神氣 亦た宛肖（真に迫る）たり（『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十五葉）。

①大註「[夫子] 自嘆以發，子貢之問」意：朱注に「不得於天而不怨天，不合於人而不尤人，但知下學而自然上達。此但自言其反己自脩，循序漸進耳。無以甚異於人，而致其知也。然深味其語意，則見其中自有人不及知，而天獨知之之妙。蓋在孔門，惟子貢之智，幾足以及此，故特語以發之。惜乎其猶有所未達也（天に得ずして天を怨まず，人に合わずして人を尤めず，但だ下學して自然と上達するを知る。此れ但だ自から其の己に反りて自から脩め，序に循いて漸進するを言うのみ。以て甚だ人に異なりて，其の知を致す無きなり。然れども深く其の語意を味わえば，則ち其の中に自から人の知るに及ばずして，而して天 獨り之を知るの妙を見る。蓋し孔門に在りて，惟だ子貢の智のみ，幾んど此れに及ぶに足る，故に特に語げ以て之を發す。惜しむらくは其れ猶お未だ達せざる所有なり）」。

◎「戒之在色」（『論語』季氏）の起に云う；

且天地不能不陰陽，聖人不能不男女，然陰陽不和則爲沴，男女不正則爲淫，君子方將參天地之道，而立生人之命，其敢自戕其生，而不知所戒乎

(且そも天地は陰陽ならざる能わず，聖人は男女ならざる能わず，然れども陰陽 和せざれば則ち沴と爲す。男女 不正にれば則ち淫と爲す，君子 方に天地と參となるの道を將って，生人の命を立つ，其れ敢て自から其の生を戕いて，戒しむる所を知らざらんや)

①天地不能不陰陽：『中庸』第一章の「天命之謂性率性之謂道脩道之謂教（天の命ずる，之を性と謂い，性に率う，之を道と謂う，道を脩むる，之を教と謂う）」の朱注に「……天以陰陽五行化生萬物氣以成形 而理亦賦焉（天は陰陽五行を以て萬物を化生す。氣は以て形を成し，理も亦た焉に賦す）……」。また，題目から截去された上文に「孔子曰，君子有三戒，少之時，血氣未定（孔子 曰く，君子に三戒有り，少き時は，血氣 未だ定まらず）」とあり，その朱注に「血氣，形之所待以生者，血陰而氣陽也（血氣は，形の〔血氣を〕待ちて以て生くる所の者なり，血は陰にして氣は陽なり）……」。

②陰陽不和則爲沴：『漢書』五行志中之上に「氣相傷，謂之沴（氣の相い傷つくを，之を「沴」と謂う）」。

③參天地：『中庸』第二十二章に「唯天下至誠，爲能盡其性，能盡其性，則能盡人之性，能盡人之性，則能盡物之性，能盡物之性，則可以贊天地之化育，可以贊天地之化育，則可以與天地參矣（唯だ天下の至誠のみ，能く其の性を盡すと爲す，能く其の性を盡せば，則ち能く人の性を盡す，能く

人の性を盡せば、則ち能く物の性を盡す、能く物の性を盡せば、則ち以て天地の化育を賛^{たす}く可し、以て天地の化育を賛^{たす}く可ければ、則ち以て天地と參^{さん}となる可し)」。

議論正大なり。因りて憶うに黄魯直云う、「人生まれ、血氣未だ定まらざる時、早に仲尼の戒に服するを知らず、故に其の壯なるや、血氣當に剛なり、而して剛ならざれば寒暑の侵し易き所以なり。道を學ぶに身を以て本と爲せば、斯の事を留意せざる可からざるなり」(陸隴其『四書講義困勉錄』所引の「樂天齋翼註」に見える)と。此の言最も當に玩味すべし(『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十五葉～十八葉)。

◎廖瀛海先生の「夫子之云」(『論語』子張)の起に云う；

吾人聞一言而有動於中、未嘗不遙而擬之曰此必某某之言也已、而考之果某某之言也、斯非幸而中之也、蓋言者心之聲^①、故即一言之微、而其人之意象恍若盡呈于其間、而告我以言者、不啻告我以心矣

(吾人一言を聞きて中を動かす有り、未だ嘗て遙にして之を擬して「此れ必ず某某の言なり」と曰わずんばあらず、而して之を考うるに果して某某の言なり、斯れ幸にして之に中るに非ざるなり、蓋し「言」とは心の聲なり。故に一言の微に即して、其の人の意象恍若(仿佛)として盡く其の間に呈わる。而して我に告ぐるに「言」を以てする者は皆に我に告ぐるのみならず心を以てするなり)

「之」字を取りて極めて空靈の妙あり。先輩の「夫人知以言高下人而不知適自肖其高下(夫れ人 以て高下を言うの人を知りて、而して適たま自から其の高下に肖るを知らず)」と異曲同工なり(『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十八葉～十九葉)。

①言者心之聲:『論語』堯曰の「不知言無以知人也(言を知らざれば以て人を知る無し)」条の朱注に「言之得失、可以知人之邪正(言の得失もて、以て人の邪正を知る可し)」とあり、『四書纂疏』論語纂疏卷十の「不知言無以知人也」条に輔廣(字は漢卿。慶源の人)の解説を引き「輔氏曰、言者心之聲也、故因言之得失則可以知其人之邪正(輔氏曰く、言とは、心の聲なり。故に言の得失に因りて則ち以て知其の人の邪正を知る可し)……」。

◎又た「教者必以正」(『孟子』離婁上)の起に云う；

今使父之教子、或有兩途焉、則亦將擇便以相處、而不必逆情之舉矣、惟是教以道尊而理、惟一是初無餘地、可爲遷就者、即父亦無如何也

(今 父の子を教えしむに、或いは兩途有り、則ち亦た將に便なるを擇び以て相い處す、而して「これは」必ずしも情に逆らわざるの舉なり、惟だ是れ教教うるに道を以てし、尊にして理あり、「惟一(集一的な道德性)」(『書經』大禹謨)は是れ初めに餘地無し、遷して就くを爲す可き者は、即ち父も亦た如何ともする無きなり)

「必有」字を取りて亦た隽永なり(『芹宮新譜』上卷・「明擒」条・十九葉)。

③借擒

「借」とは「假」なり。本題^{はじめ}端を發し難ければ、遂に他義に假りて以て之を起す。題の外より借り入る者有り、題内より借り入る者有り、章旨より借り入る者有り、節旨より借り入る者有り。其の法一ならず。借り以て端を發するに過ぎず。題を擒えるの計と爲す。認真（まじめにする）なるを得ず。本國の兵力寡弱なり、而して他師を借り以て之を助く。「厥の渠魁^{つぐ}を殲し」（『書經』胤征：「殲厥渠魁」）、凱旋し奏捷（向帝王報捷）するに迫れば、則ち仍お各々部壘（駐屯地）に歸り、滋擾（擾亂を起こす）せしむること母きが如し。亦た用兵の一奇なり。此の法を知らざる可からず（『芹宮新譜』上卷・「借擒」条・十九葉）。

「借」とは「假」のことである。題目が書き始めにくければ、ほかの事を借りてきて書き始める。題目の外から借りて始めることもあり、題目の内から借りてくるものもある。章旨から借りてくるものもあり、節旨から借りてくるものもある。その方法はひとつではない。文の發端にするものを借りるだけである。たんなる題目を捉えるやり方である。真剣に取り組んではいけない。それはたとえば、本國の兵力が弱くて少なくて、他の軍を借りて助けてもらい、首謀者のみを誅殺し、凱旋して勝利を報告すれば、それぞれ駐屯地に帰り、落ち着くようなものである。また用兵上の奇策である。そのやり方は、知っていなければならない。

[用例]

◎「而恥惡衣惡食者」（『論語』里仁）の起に云う；

且人心羞惡之良^①，其學者入道之機乎，故千古有志之士，皆千古有恥之人也，士而無恥則志不立矣，士而知恥則其志不凡矣，然道中之恥不可無，道外之恥不可有，吾且爲志道者一觀其所恥何如也

（且^{そも}も人心は羞惡の良なり，其れ學ぶ者の道に入るの機なるか，故に千古志有るの士，皆な千古恥有るの人なり，士にして恥無ければ則ち志立たず，士にして恥を知れば則ち其の志不凡なり，然れども道の中の恥は無くす可からず，道の外の恥は有る可からず，吾^{まさ}且に道に志し^{こころざ}を爲す者なり，一に其の恥ずる所を觀るは何如なるや）

①人心羞惡之良：『孟子』公孫丑上に「……無惻隱之心，非人也。無羞惡之心，非人也。無辭讓之心，非人也。無是非之心，非人也（惻隱の心無きは，人に非ざるなり。羞惡の心無きは，人に非ざるなり。辭讓の心無きは，人に非ざるなり。是非の心無きは，人に非ざるなり）」。

②志道：題目の朱注に「程子曰，志於道而心役乎外，何足與議也（程子曰く，道に志して，心外に役せらるるは，何ぞ與に議するに足らんや）」。

「志」字に借りて，「恥」字^{とりだ}を剔す。筆意 ●隽なり（『芹宮新譜』上卷・「借擒」条・十九葉～二十葉）。

◎「官事不攝」(『論語』八佾)の起に云う；

昔桓公之尊王命以告諸侯也，曰官事無攝^①，蓋恐缺人而廢乃事也，顧侯國之事患其多，故必衆建以充之，私家之事慮其少，不必具官而已足不謂桓公以此布告諸侯者，而管仲遂以^②此施之于一家也^③

(昔桓公の王命を尊んで以て諸侯に告ぐるなり，「官事（一家の事）^か攝ぬる無し」と曰うは，蓋し人を缺きて乃の事を廢するを恐るるなり。顧だ侯國の事は，其の多きを思う，故に必ず「さらに役職を」^{おほ}衆く建て以て之に充つ，私家の事は，其の少きを慮り，必ずしも官を具えずして已に足る，桓公 此を以て諸侯に布告すと謂わざる者なり，而して管仲 遂に此を以て之を一家に施すなり)

①官事無攝：朱注に「……攝，兼也。家臣不能具官，一人常兼數事。管仲不然。皆言其侈（攝は，兼ぬるなり也。家臣 官を具^{そな}うること能わず，一人 常に數事を兼ね。管仲 然らず。皆な其の侈なるを言う）」。

②衆建：用例としては『漢書』賈誼傳に「欲天下之治安，莫若衆建諸侯而少其力（天下の治安を欲すれば，衆く諸侯を建て其の力を少くは若くは莫し）」。

③此：管仲は，家臣でありながら，一家の事について，役職ごとに職務を担当させる人を設けたこと。本来ならば，家臣の家の家事は，一人にいくつかを兼務させる）。

此れ題外より借り入る。恰かも本題を翻して醒すに好し（『芹宮新譜』上卷・「借擒」条・二十葉）。

◎「百乘之家」(『論語』公治長)の起に云う；

子大夫問仁，是求天下一家之量于吾黨也，而吾則謂與其空談性命，遠而求天下所空觀之人，不若寔考治才，近而求一家所利賴之士也

(子大夫^{ママ}（孟武伯） 仁を問う，是れ天下・一家の量を吾黨に求むるなり，而して吾 則ち其の性命を空談して，遠く天下 空觀する所の人を求むる與りは，寔に治むるの才を考え，近く一家 利賴（頼る）する所の士を求むるに若かずと謂うなり)

此れ章旨に^{したが}跟着いて借り入る（『芹宮新譜』上卷・「借擒」条・二十葉）。

◎「有婦人焉」(『論語』泰伯)の起に云う；

有虞氏之治天下也，五臣之内不聞配以英皇，蓋神聖盈朝，不必借才于宮壺也，降及我周，師濟有盈廷之盛，而中宮著内助之功，論者，不得不屈指及之也

(有虞氏の天下を治むるや，五臣の内に，配するに英皇（帝舜二妃の女英と娥皇）を以てするを聞かず，蓋し神聖 朝に盈ち，必ずしも才を宮壺に借りざればなり，降りて我が周に及び，師濟（師師濟濟：非常に多く） 廷に盈つるの盛んなるも，中宮（皇后）内助の功を著わすこと有り，「したがって」論者 指を屈して之（武王の后妃の邑姜）に

及ばざるを得ざるなり)

①有虞氏之治天下也五臣：題目より截去された上文に「舜有臣五人而天下治（舜に臣五人有りて天下治まる）」とあり、その朱注に「五人とは、禹・稷・契・皋陶・伯益」。

②師濟有盈廷之盛、而中宮著内助之功：題目の前後は、「武王曰、予有亂臣十人。孔子曰、才難、不其然乎。唐虞之際、於斯爲盛、有婦人焉、九人而已（武王 曰く、予に亂臣（亂を治めるの臣）十人有り。孔子 曰く、才 難し、と。其れ然らずや。唐（堯）・虞（舜）の際は、斯れより盛んなりと爲す。〔しかし亂を治めるの臣十人の中に〕婦人（武王の後妃の邑姜）有り、〔したがって男性は〕九人のみ」。

此れ上文に^{したが}跟着いて借り入る（『芹宮新譜』上巻・「借擒」条・二十葉～二十一葉）。

◎又た「有婦人焉」（『論語』泰伯）の起に云う；

昔桀之亡也、以妹妹喜、紂之滅也、以妲己、幽之衰也、以褒姒、蓋哲婦傾城、千古爲昭矣、然亡國之君、因用婦言而致、惟家之索興（興）王之代由得内助而成、燹伐之功、此亦氣運所関、不可槩而論也

（昔^{むかし}桀の亡ぶや、妹^{いもうめ}喜を以てす、紂の滅ぶや、妲己を以てし、幽の衰うるや、褒姒（褒姒）を以てす、蓋し「哲婦（知がある婦人）^{くに}城を傾く」（『詩經』雅・瞻印）、千古^{あき}昭らかと爲す、然れども亡國の君は、婦の言を用いるに因りて「亡国を」致す、惟れ家の索（婚姻）と王の代わるは、内助を得るに由りて成る、燹伐（協同で征伐する）の功は、此れ亦た氣運の関する所なり、槩して論ず可からざるなり）

此れ題外より借り入る（『芹宮新譜』上巻・「借擒」条・二十一葉）。

◎「丘也聞有國有家者」（『論語』季氏）の起に云う；

今者顓臾之伐、何其知有家而不知有國也、夫國家原無異理、惟知有國然後知有家、亦惟知有家而愈當知有國、古人連類及之而必以國先於家、其次第有昭然不爽者、試爲求述所聞

（今者^{いま}〔魯の権臣の季氏が魯に附庸する〕顓臾の伐つは何ぞ、其れ家^{たも}を有つを知りて國を有つを知らざるなり、夫れ國家 原より異理無し、惟だ國を有つを知りて、然る後に家^{たも}を有つを知るのみ、亦た惟だ家^{たも}を有つを知りて愈々當に國を有つを知るべきのみ、古人 連なりて之に類及す、而して必ず國を以て家より先にす、其の次第 昭然として爽^{たが}わざる者有り、試みに求むるが^{ため}爲に聞く所を述べん）

章旨に^{したが}跟着いて「家」・「國」を^{とら}擒う。●●●●●●●●●●、其の着眼は「國」を「家」より先にするの上に在り。此れ擒題の法なり（『芹宮新譜』上巻・「借擒」条・二十一葉）。

◎「昆弟也」（『中庸』第二十章第七節）の起に云う；

我周大封同姓，兄弟之國且至五十，説者謂強幹弱枝，先王之所以庇本根而建不拔也，不知友于^①之誼，本于天性，凡屬人群，莫不念天顯^②而修人紀^③，寧獨周道親親^④，宗盟^⑤是篤云爾哉

(我が周 大いに同姓を封じ，兄弟の國は且に五十に至らんとす，説く者は「強幹弱枝（中央の力を強くして，地方の力を弱める）にして，先王の本根を庇^{かば}いて不拔（牢固）を建つる所以なり，「友于」の誼しきは天性に本づくを知らず」と謂うも，凡そ人群に屬するに，天顯^{おも}を念いて人紀を修めざるは莫し，寧ぞ獨り周道の親を親しみ，宗盟 是れ篤しとせんと爾^{しか}云うや)

①友于：『論語』爲政に『書經』君陳を引いて「子曰，書云孝乎，「惟孝友于兄弟，施於有政」，是亦爲政矣其爲爲政（子 曰く，『書〔經〕』に孝を云うか，「惟れ孝は兄弟に友に，有政に施す」，是れ亦た政を爲すなり，奚^{なん}ぞ其れ政を爲すを爲さん，と）」。

②念天顯：『書經』康誥に「于弟弗念天顯，乃弗克恭厥兄（弟に于いて天顯（長幼の序）^{おも}を念わず，乃ち厥の兄を恭する^{あた}克^あわす）」。

③修人紀：『書經』伊訓に「先王肇修人紀（先王 肇^{はじ}めて人紀（人としての規律）を修む）」。

④親親：『孟子』告子下に「……小弁之怨親親也親親仁也（小弁（『詩經』小雅・小弁）の怨めるは，親^{おや}を親しめばなり，親^{おや}を親しむは仁なり）……」とあり，朱注に「……親親之心，仁之發也（親を親しむの心は，仁の發なり）」。

⑤宗盟：『左傳』隱公十一年に「周之宗盟，異姓爲後（周の宗盟，異姓を後と爲す）」。

（『芹宮新譜』上卷・「借擒」条・二十一葉～二十二葉）。

◎「朋友之交也」（『中庸』第二十章第七節）の起に云う；

夫人並生天地之間，莫不有相與之樂，然義合^①則從，故上下交而其象泰^②，道合^③則濟，故同人交^④，而其志通，交之爲義大矣哉，臣得于君臣父子夫婦昆弟而外，著其道于朋友

（夫れ人 並びに天地の間に生まれ，相い與にするの楽しみ有らざるは莫し，然らば義合えば則ち從う，故に「上下 交わる」は，其の象「泰〔卦〕」なり，道 合えば則ち濟る，故に「同人〔卦〕」交わりて，其の志 通ず，之に交わりて義を爲すや大なるかな，臣 君臣・父子・夫婦・昆弟より外に得て，其の道を朋友^{あら}に著せり）

①友于：『論語』鄉黨に「朋友死，無所歸（朋友死して無所歸する所無し）」条の朱注に「朋友以義合（朋友は義を以て合す）」。

②上下交而其象泰：『易經』泰卦・彖傳に「泰……上下交而其志同也（泰は，……上下 交って其の志しは同じきなり）」。

③道合則濟：『禮記』内則に「四十始仕……道合則服從，不可則去（四十にして始めて仕う。……道 合えば則ち服從し，不可なれば則ち去る）……」。

④同人：『易經』雜卦傳に「同人〔の卦〕は，親なり」。

「交」字を拈りて旨を得（『芹宮新譜』上卷・「借擒」条・二十二葉）。

◎「壯者以暇日」（『孟子』梁惠王上）の起に云う；

今者^①兩何告警^②，丁壯先驅，抑何民間之無暇日也，不知處多事之國歲月皆形其迫狹，值太平之日居^{ママ}諸（日居月諸）每覺其寬間，此亦時勢所関，而施仁政于民者，正不敢聽其坐荒日力也

（今者^{いま}兩つの何れの告警（警告）にして，丁壯^{かりた}先ず驅てられん，抑そも何ぞ民間の暇日無きや，多事（多事多難）に處るの國の歲月は皆な其の迫狹（せまくるしい）を形にし，太平に値るの日居〔月〕諸（日月）は毎に其の寬間（ゆったりと静か）なるを覺ゆるを知らず，此れ亦た時勢の関する所なり，而して仁政を民に施す者，正に敢て其の荒なる日力（泛指時間，光陰）に坐するを聽かざるなり）

①兩何告警：截去された上文に「梁惠王曰，晉國天下莫強焉。叟之所知也。及寡人之身，東敗於齊，長子死焉。西喪地於秦七百里。南辱於楚。寡人恥之。願比死者，一洒之。如之何則可（梁惠王 曰く，晉國は天下 焉れより強きは莫きは，叟（先生：孟子）の知る所なり。寡人（惠王）の身に及び，東のかた齊に敗れ，長子 焉れに死す。西のかた地を秦に喪^{うしな}うこと七百里。南のかた楚に辱しめらる。寡人（惠王）之を恥ず。願わくは死者の比^{ため}に，一たび之を洒^{すす}がん。之を如何すれば則ち可ならん）」。

②居諸：『詩經』邶風・柏舟に「日居月諸，胡迭而微（日や月や，胡ぞ迭つて微なるや）」。孔穎達疏や『詩集傳』卷二・邶一之三の「柏舟」の注に「居・諸，語辭也（「居」・「諸」は，語辭なり）」とある。後には「日月，光陰」の意味で用いられる。

首節^{したが}に跟着「暇日」を借り擒^{とら}う。并せて「壯者」を映合（照らして呼応する）し，「以」字を収め致す。手法 綿密なり（『芹宮新譜』上卷・「借擒」条・二十二葉）。

◎「有牽牛而過堂下者」（『孟子』梁惠王上）の起に云う；

嘗觀王者之世^①，牛放于桃林^②，伯者之國^{ママ}，耳（其）孰於壇坫^③，蓋王者好生^④，故物類亦被其矜全，伯者好殺，凡盟會悉昭其雄武，臣未知王之所以自處者何如，而堂下之人早有牽牛而過者（嘗て觀るに王者の世，牛 桃林に放つ，伯（霸）者の國，耳（其）れ壇坫に執わる，蓋し王者は生（生命）を好む，故に物類 亦た其の矜全（愛惜して保全する）を被むる，伯（霸）者は殺すを好む，凡そ盟會 悉く其の雄武を昭らかにするなり。臣（孟子）未だ王（齊の宣王）の自から〔霸者か王者かのどちらに〕處る所以の者は何如なるかを知らず，而して堂下の人の早に牛を牽きて過ぐる者有るをや）

①王者之世：截去された上文に「齊宣王問曰，齊桓・晉文之事，可得聞乎。孟子對曰，仲尼之徒，無道桓文之事者，是以後世無傳焉。臣未之聞也，無以則王乎（齊の宣王 問いて曰く，〔霸者であつた〕齊桓（齊の桓公）・晉文（晉の文公）の事，得て聞く可きか，と。孟子 對えて曰く，仲尼の徒，〔霸

者であった]桓(齊の桓公)・文(晉の文公)の事を道^いう者無し、是^{こゝ}を以て後世 傳^{つた}うる無し。臣(孟子) 未だ之を聞かざるなり、以^{もつ}むこと無ければ則ち王(天下に王者となる道)か……」とあり、朱注に「齊宣王、姓田氏、名辟疆、諸侯僭稱王也。齊桓公・晉文公皆霸諸侯者(齊の宣王、姓は田氏、名は辟疆、諸侯の王を僭稱するなり。齊の桓公・晉の文公は皆な諸侯に覇たる者なり)」。

②桃林:古の地名。『書經』武成に「[周の武王は天下を定めて、] 偃武修文、歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服(武を偃せ文を修め、馬を華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放ち、天下に服せ弗るを示す)」。

③壇坫:『史記』魯仲連傳に「桓公朝天下、會諸侯、曹子(曹沫^{そうかい})以一劍之任、枝桓公之心於壇坫之上([齊の] 桓公 天下に朝し、諸侯に會するに、曹子(曹沫^{そうかい}) 一劍の任を以て、桓公の心を壇坫(會盟の壇)の上に枝(思い通りにする)す)」。

④好生:『書經』大禹謨に「好生之德、洽于民心(生(民の生命)を好むの德、民心に^{あま}洽ねし)」。
上文に^{したが}いて「牛」字を擒う。題に歸するに甚だ活なり。此れ用筆の妙なり(『芹宮新譜』上卷・「借擒」条・二十二葉~二十三葉)。

◎「鄒與魯閔」(『孟子』梁惠王下)の起に云う;

嘗考春秋紀兵^①、有謂之伐者、聲罪致討是也、有謂之侵者、潛師掠境是也、有謂之圍者、縋其邑也、有謂之入者、造其都也、有謂之襲者、輕行掩之也、有謂之戍者、聚兵守之也、有謂之戰者、皆陣也、有謂之敗者、詐戰也、二百四十五年中、從未有以閔書者、有之自孟子時之鄒魯始

(嘗て考うるに『春秋』の兵を紀すに、之を「伐」と謂う者有り、罪を^{なら}聲して討つを致す。是なり、之を「侵」と謂う者有り、師を潛めて境(国境)を^{うば}掠^{これ}う是なり、之を「圍」と謂う者有り、其の邑を^{しば}縋る也、之を「入」と謂う者有り、其の都に^{いた}造る、之を「襲」と謂う者有り、輕行(輕装で行軍する)して之を掩(襲撃/捕捉)するなり、之を「戍」と謂う者有り、兵を聚めて之を守るなり、之を「戰」と謂う者有り、皆な陣するなり、之を「敗」と謂う者有り、詐り戦うなり、二百四十五年中、^{これまで}從 未だ「閔」を以て書する者有らず、之れ有るは孟子の時の鄒・魯より始まる)

①紀兵:『春秋胡氏傳』卷第一・隱公二年・「鄭人伐衛」条に「凡兵、聲罪致討曰伐、潛師掠境曰侵、兩兵相接曰戰、縋其城邑曰圍、造其國都曰入、徙其朝市曰遷、毀其宗廟社稷曰滅、詭道而勝之曰敗、悉虜而俘之曰取、輕行掩之曰襲、已去而躡之曰追、聚兵而守之曰戍、以弱假強而能左右之曰以、皆誌其事實、以明輕重。內兵書敗曰「戰」、書滅曰「取」、特婉其詞、爲君隱也(凡そ兵、罪を^{なら}聲して討つを致すを「伐」と曰う、師を潛めて境(国境)を^{うば}掠^{これ}うを「侵」と曰い、兩兵 相い接するを「戰」と曰い、其の城邑^{しば}を縋るを「圍」と曰い、其の國都に^{いた}造るを「入」と曰い、其の朝市(朝廷)を徙すを「遷」と曰い、其の宗廟・社稷を毀つを「滅」と曰い、詭道(詭詐之術)もて之に勝つを「敗」と曰い、悉^{とりこ}て虜にして之を俘^{とら}えるを「取」と曰い、輕行(輕装で行軍する)して之を掩(襲

撃／捕捉)するを「襲」と曰い、已に去りて之を躡^おうを「追」と曰い、兵を聚めて之を守るを「戍」と曰い、弱きを以て強きを假りて能く之を左右するを「以」と曰う。皆な其の事實を誌^{しる}し、以て輕重を明らかにす。内兵(國內的兵亂)もて「敗」と書するを「戰」と曰い、滅するを書して「取」と曰うは、特に其を詞を婉[曲]にし、君の爲に隱すなり)。

原より胡安國の『春秋傳』に本づき題外より入る。恰かも「関」字を翻出するに好し。奇にして法とすと謂う可し。●●●●●●(『芹宮新譜』上卷・「借擒」条・二十三葉)。

◎「不目逃」(『孟子』公孫丑上)の起に云う；

從來心之所注，目必隨之，是目固因心而動者也，顧心無形而有宰，目遇物而屢遷，是不動于心者，何必不動于目也，乃自養勇者出之，雖未知其心之何如，而其目固有断然不動者

(従り來るに心の注ぐ所，目 必ず之に隨う，是れ目 固より心に因りて動く者なればなり，顧だ心は形無くして宰^{つかさ}どる有り，目は物に遇えば屢々遷る，是れ心を動かさざる者，何ぞ必ず目を動かさざらんや，乃ち自から勇を養う者は之に出ず，未だ其の心の何如なるかを知らずと雖も，而れども其の目 固より断然として動かさざる者有り)

①養勇：題目と截去された上文に「北宮黜之養勇也，不膚撓不目逃(北宮黜の勇を養うや，膚撓^{はくきやうゆう}まず(肌を刺されてもひるまない)，目逃^{まじろ}がず([目をつかれても]まなこをうごかさない))……」。

「心」字に借りて「目」字を擒え，「動」字に借りて「逃」字を挑して，絲絲入扣(一字一句急所をとらえている)す(『芹宮新譜』上卷・「借擒」条・二十三葉～二十四葉)。

④點染映合¹⁾

題[目]の直ちに擒^{とら}えて得ず，通套(通俗なもの)にし易き者有れば，傍題中の字面を須^{もち}いて點染(文章を修飾する)して之を映合(関連呼応させる)。此れ不切(不適切)の切(適切)なり。蓋し小題の花鳥を畫くが如きに，獨り鳥 飛び鳴くは何の意味有らん。片花爛熳(茂盛)たるも亦た風情を少く。惟れ鳥にして之に棲むに茂林を以てし，竹花(竹の花)を修め，之を襯(際立たせる)するに怪石・清波(澄み切った水流)を以てすれば，則ち彼此 映發(照り映える)し趣きを生ずること盎然(充滿する)たり。問う者をして心暢神怡(気分が広々としてすがすがしい)す。斯れ寫生(生意を描写する)の妙

1) 『斯文規範』によると，「映合」はつぎのように説明される。

題[目]の正意・喻意もて俱に下面の正意を講じ映合(照らして呼応する)し，上面の喻意に着する有るを言うなり。其の實 上の「關合(關連呼応させる)」と異なる無し。他の所謂ゆる「雙關回映」と此の二法(映合・關合)とは名を異にして實は同じ(『斯文規範』卷之四・六葉～七葉・「一日映合」条)。

①『斯文規範』に「題[目]の正意・喻意もて俱に上面の喻意を講じ關合(関連づけて呼応させる)し，下面の正意に着する有るを言うなり」(『斯文規範』卷之四・六葉～七葉・「一日關合」条)。

手と爲す。文を作るも亦た此の如し。而して小講（起講）尤も此の法を知らざる可からず（『芹宮新譜』上巻・「點染映合」条・二十四葉）。

題目を直接にとらえることができず、解法が俗に流れやすいものならば、題目の重要でない字面を用いて點染（文字を修飾する）し、これを映合（関連呼応させる）させる。これは不適切ではあるものの仕方のないものである。花や鳥を描写するのに、鳥だけが飛び鳴くのでは、何の意味があるのだろうか。花だけが爛漫と咲き誇っているのも、やはり風情がない。鳥を茂林に配置し、竹の花を添え、これらを際立たせるために奇石や澄み切った水流をもつてすれば、鳥も花も照り映え、趣きをますます生じる。絵を見る人の気分を広々としてすがすがしくさせる。これは、生意を描写する妙手である。八股文の作成もこのようなものである。小講（起講）作成においてはこの方法を知っていなければならない。

〔用例〕

◎「食無求飽」（『論語』學而）の起に云う；

且生人有至味焉，饜之飫之而不盡也，吾心有大美焉，咀之味之而無窮也，彼庸庸者，顧求之於口腹間，亦未奉教於君子矣

（且そも生人（人々）至味（至高の美味）有り，之を饜^{くいあ}き・之を飫^{あき}るも盡きざるなり，吾心 大美有り，之を咀^かみて之を味うも窮まらざるなり，彼の庸庸（平凡）なる者，顧だ之を口腹の間に求む，亦た未だ教えを君子に奉ぜざるなり）

①口腹：『孟子』告子上の「體有貴賤（體に貴賤有り）……」の朱注に「賤而小者，口腹也，貴而大者，心志也（賤にして小なる者は，口腹なり，貴くして大なる者は，心志なり）」。

（『芹宮新譜』上巻・「點染映合」条・二十四葉～二十五葉）。

◎「居無求安」（『論語』學而）の起に云う；

吾心之内有安宅，固人人可遊其宇而托庇焉者也，乃人不知求安于心，而徒求安于身，是曠其宅而勿居^②，舉足皆危境矣，安得下思君子

（吾心の内に安宅有り，固より人人 其の宇に遊びて托庇（庇護される）す可き者なり，乃ち人 心に「求安（安きことを求める）」を知らず，而して徒だ身に「求安（安きことを求める）」す，是れ其の宅を曠^{ひな}しくして居らず，舉足（舉動） 皆な危境なり，安くんとぞ下〔の「敏於事，而慎於言，就有道而正焉，可謂好學也已（事に敏にして，言に慎しみ，有道に就きて正す，學を好むと謂う可きのみ）〕を得て「君子」を思わん）

①安宅：『孟子』公孫丑上に「孔子曰，里仁為美，擇不處仁，焉得智。夫仁天之尊爵也，人之安宅也。

莫之禦而不仁，是不智也（孔子 曰く，里は仁なるを美と爲す。擇びて仁に處らずんば，焉^{いずく}ぞ智たるを得ん，と。夫れ仁は天の尊爵なり，人の安宅なり。之を禦^{とど}むる莫^なくして不仁なるは，是れ不智なり）……」。

②曠其宅而勿居：『孟子』離婁上に「仁人之安宅也，義人之正路也。曠安宅而弗居，舍正路而不由，哀哉（仁は人の安宅なり，義は人の正路なり。安宅を曠しくして居らず，正路を捨てて由らず，哀しいかな）」。

此の題 兩句もて連出すれば，「求」字を拈^{つまみと}る可し。只だ「ここはふたつに分割して」一句「ごとにして」出「題」す。「居」・「食」・「安」・「飽」の字面に向いて映合（照らして呼応する）せざれば，是れ^{どこ}那に切なるを得んや。然れども字面を映合（照らして呼応する）せんと欲して，題外に向かいて牽扯すれば則ち根を離れて脱節（前後のつながりが切れる）す。惟だ「學」字に緊覲（せま^どつてうかがう）し，各句を點染（文字を修飾する）貼合（はりあわす）すれば，通套（俗な慣用表現）に落ちず。又た関し照らすこと有るなり（『芹宮新譜』上卷・「點染映合」条・二十四葉～二十五葉）。

◎「乗桴浮于海」（『論語』公冶長）の起に云う；

予向觀滔滔之天下，固不欲坐視其沉淪者也，乃作楫●●，而濟川無術，則不得不縱吾意之所如，而一葦杭之，聊寄嘯歌于世外也已^⑤

（予 向に滔滔たるの天下を觀る，固より其の沉淪するを坐視せんと欲せざる者なり，乃ち楫（舟）を作り●●，而して川を濟るに術無ければ，則ち吾意の如く所を縦にせざるを得ず，而して「一葦もて之を杭り」，聊か嘯歌を世外に寄せるなり）

①滔滔之天下：『論語』微子に「……[桀溺]曰滔滔者天下皆是也，而誰以易之。且而與其從辟人之士也，豈若從辟世之士哉（[桀溺]曰く，滔滔たる者 天下皆な是れなり。而して誰と以の之を易えん。且つ其の人を辟くるの士に従わん^き與りは，豈に世を辟くるの士に従うに若かんや）……」とあり，朱注に「滔滔流而不反之意。以，猶與也。言天下皆亂，將誰與變易之（「滔滔」は，流れて反らざるの意。「以」は，猶お「與」のごときなり。言^{いう}は天下皆な亂れ，將に誰と與に之を變易せんとす）……」。

②濟川：『書經』說命上：「爰立作相，王置諸其左右。命之曰，朝夕納誨，以輔臺德。若金，用汝作礪，若濟巨川，用汝作舟楫（爰に立てて相と^なとし，王^{これ}諸を其の左右に置く。之に命じて曰く，朝夕誨^{おしえ}を納れ，以て臺が德を輔^{たす}けよ。若し金なれば，汝を用^もて礪と作さん。若し巨川を濟れば，汝を用^もて舟楫と作さん）」。

③一葦航之：『詩經』衛風・河廣に「誰謂河廣，一葦杭之（誰か謂わん河 廣しと，一葦もて之を杭^{わた}らん）」。

④嘯歌：『詩經』小雅・白華に「嘯歌傷懷，念彼碩人（嘯歌傷懷して，彼の碩人^{おも}を念う）」。

⑤也已：上文に順落して，其の此れに止まるを明らかにするの意なり（『舉業辨字』歇語辭第七・三十四葉・「也已」条）。

「海」字・「浮」字・「桴」字に緊切（しっかりせまる）して點染（文字を修飾する）し，却って●相に落ちず（『芹宮新譜』上卷・「點染映合」条・二十五葉）。

◎「朽木不可彫也」(『論語』公冶長)の起に云う；

且學者之受裁于師，猶良木之受裁于工也，雖有名材，不斲不精，雖有美質，不教不成，然必有受斲之地與受教之質，而後師與工得以致其力，今之當吾前者固何如乎

(且^{そも}も學ぶ者の裁(割いて正しくすること)を師に受くるは，猶お良木の裁を工に受くるがごときなり，名材有りと雖も，斲^きらざれば精ならず，美質有りと雖も，教えざれば成らず，然らば必ず斲^きるを受けるの地と教を受けるの質と有り，而して後に師と工とは以て其の力を致す，今の吾が前に當る者は固より何如なるや)

正喻(正面からの説明と比喻) 互いに説きて此の興骸(體)を得(『芹宮新譜』上卷・「點染映合」条・二十五葉)。

◎「行不由徑」(『論語』雍也)の起に云う；

古人之好賢也，曰人之好我，示我周行^①，夫周行豈易示哉乎，日無遵道遵路^②之思而托足于傾斜便捷之地，則一步趨先已失其正矣，其又何以示我，偃于是又有以知減明也

(古人の賢を好むや，「人の我を好せば，我に周行(大道)を示せ」と曰う，夫れ周行は豈に示し易きや，日々道に^{したが}違^{したが}い・路に^{したが}違^{したが}うの思い無くして傾斜(邪僻)・便捷(すばしこい)の地に托足(立脚)すれば，則ち一步 趨^{よみ}(疾行)するに先ず已に其の正を失う，其れ又た何を以て我に示さん，偃(子游) 是に于いて又た以て「澹臺」減明を知る有るなり)

①人之好我示我周行：『詩經』小雅・鹿鳴に「人之好我，示我周行(人の我を好せば，我に周行(大道)を示せ)」とあり，『詩集傳』で朱子は，「周行，大道也(周行は，大道なり)」と注している。

②遵道遵路：『書經』洪範に「無偏無陂，遵王之義。無有作好，遵王之道。無有作惡，遵王之路(偏無く陂く，王の義に^{したが}遵^なえ。好を作す有る無く，王の道に^{したが}遵^なえ。惡を作す有る無く，王の路に^{したが}遵^なえ)」。

「行」字・「徑」字を切定(深く定めて)して映合(照らして呼応する)す，筆意 大方(俗ではない)なり(『芹宮新譜』上卷・「點染映合」条・二十五葉～二十六葉)。

◎「如臨深淵」(『論語』泰伯)の起に云う；

嘗聞孝子不臨深^①，畏其險也，夫不測之險何地無之，必俟身臨其境，而後知所畏焉，亦已晚矣，故予之守身，時時監于水焉

(嘗て聞く孝子は深きに臨まず，其の險なるを畏ればなり，夫れ不測の險は何れの地も之れ無けんや，必ず身の其の境に臨むを俟ちて，而して後に畏るる所を知る，[これでは]亦た已に晩し，故に予の身を守るや，時時に水に監みるなり)

①孝子不臨深：『禮記』曲禮上に「爲人子者，……不登高，不臨深(人の子爲る者は，……高きに登らず，深きに臨まず)……」。

此れ借擒にして兼ねて點染(文字を修飾する)を用うる者なり(『芹宮新譜』上卷・「點

染映合」条・二十六葉)。

◎「如履薄氷」(『論語』泰伯)の起に云う；

且吾嘗自顧一身，托跡皆危地也而危之中，尤有其至危者，失足^①不止●●●●，即底陷溺，其危有更甚于深淵者，豈獨如臨而已哉

(且^{そも}も吾^{みず}嘗て自から一身を顧みるに，托跡(身を寄せる)するは皆な危地なり，而して危きの中，尤も其の至りて危うき者有り，足(進退・動作)を失うは，●●●●に止まらず，即ち陷溺(溺れる)を底(致)す，其の危うきは更に深淵より甚しき者有り，豈に獨り「臨むが如き」のみなるや)

①失足：『禮記』表記に「君子不失足於人，不失色於人，不失口於人(君子 足を人に失わず(人 に対して態度の正しさを失う。足は進退・動作)，色を人に失わず，口を人に失わず)」。

「履」を切定(深く定めて)して映合(照らして呼応する)す。●●●●●●●●(『芹宮新譜』上卷・「點染映合」条・二十六葉)。

◎「硜硜然」(『論語』子路)の起に云う；

今夫硜硜者易缺，皎皎者易汚，士生斯世，與其堅確以自守^①，毋寧脂韋以從俗乎，噫嘻爲此說者，是欲棄其介石之貞，而毀方以爲員也，非所論于必信必果者

(今夫れ硜硜なる者は^か缺け易し，皎皎(清白)なる者は汚れ易し，士 斯の世に生れ，其の堅確以て自から守る^{より}與^{むし}は，寧ろ脂韋(そつがない)以て俗に従うこと母からんか，噫嘻，此の説を爲す者，是れ其れ介石の貞(操守の堅貞)を棄て，而して方を毀ちて以て員(圓)と爲さんと欲するなり，「必ず信」・「必ず果」を論ずる所の者に非ず)

①堅確以自守：題目の朱注に「硜，小石之堅確者。小人，言其識量之淺狹也。此其本末皆無足觀，然亦不害其爲自守也，故聖人猶有取焉。下此，則市井之人，不復可爲士矣(硜とは，小石の堅確なる者なり。小人とは，其の識量の淺狹なるを言うなり。此れ其の本末皆な觀るに足る無し，然れども亦た其の自から守るを爲す^{そこな}を害わざるなり，故に聖人 猶お取る有り。此れより下は，則ち市井の人，復た士と爲す可からざるなり)」。

②介石之貞：『易經』豫卦・六二爻辭に「介石，不終日，貞吉(石[のよう]に[涓]介たり，日を終えず，貞にして吉なり)」。

題[目]は係れ疊(疊)字(同じ字を重ねる)なり。文も亦た疊字を以て之を映す。妙にして●●有り(『芹宮新譜』上卷・「點染映合」条・二十六葉)。

◎「虎兕出柙」(『論語』季氏)の起に云う；

且以私家而伐社稷之臣^①，是肆其爪牙之毒而逞其搏噬之威也，陳力者不能箝制而束縛之，而顧任其鳴張焉，是何異傳之翼而助其處乎，爾言誠過矣

(且^{そも}も私家(大夫の家)を以て社稷の臣を伐つ、是れ其の爪牙の毒を肆にして、其の搏噬(侵略吞併)の威を逞しくするなり、陳力(役職に在る)なる者は、箝制(制御)して之を束縛する能わず、而して顧だ其の鴟張(凶暴)に任すのみ、是れ何ぞ傅の翼(凶惡な者が權力地位等を得て、更に惡事を行なう)にして其の處を助けるに異ならんや、爾^{なんじ}(冉有)の言 誠に過てり)

①社稷之臣：題目から截去された上文に「夫顓臾、昔者先王以爲東蒙主。且在邦域之中矣、是社稷之臣也、何以伐爲(〔魯の權臣の季氏が伐とうとする顓臾は〕昔者先王^{せんゆ} 以て東蒙^{むかし}(朱注：東蒙は、山の名なり)の主と爲す。且つ〔魯の〕邦域の中に在り、是れ社稷の臣なり、何ぞ伐つを以て爲さん)」。

「虎」・「兕」・「柙」字を切定(深く定めて)して映合(照らして呼応する)す。句句 題[目]に着するなり(『芹宮新譜』上卷・「點染映合」条・二十七葉)。

◎「白鳥鶴鶴」(『孟子』梁惠王上)の起に云う；

嘗聞禽鳥得氣數之先、故雉鳴于鼎^①、而興商火化爲鳥而滅紂^②、然王者不言符瑞、故岐山不修鳴鳳^③之祥、而靈囿止歌白鳥之什^④、請得爲王陳之

(嘗て聞く禽鳥 氣數の先を得、故に雉 鼎に^な雉き、而して商を興すに火の化して鳥と爲りて紂を滅す、然れども王者 符瑞を言わず、故に岐山(周の根拠地) 鳴鳳の祥に^{おこ}修らず、而して靈囿 止^④白鳥の什(詩篇)を歌う、請う王の^{ため}爲に之を陳ぶるを得ん)

①雉鳴于鼎：『書經』高宗彤日の序に「高宗祭成湯、有飛雉升鼎耳而雉(高宗 成湯を祭る、飛雉有りて鼎耳に^{のぼ}りて^な雉く)」。

②興商火化爲鳥而滅紂：『史記』周本紀に、「〔周の武王が殷の紂王を伐つために黄河を渡ると〕有火自上覆於下、至於王屋、流爲鳥、其色赤(火の上〔流〕より下〔流〕を覆い、王屋(武王の陣)に至りて、流れて鳥と爲る有り。其の色 赤し)」。

③鳴鳳：『詩經』大雅・卷阿に「鳳皇鳴矣、於彼高岡(鳳皇 鳴く、彼の高岡に)」とあり、鄭箋に「鳳皇鳴於山脊之上者、居高視下、觀可集止、喻賢者待禮乃行、翔而後集(鳳皇 山脊の上に鳴くとは、高きに居りて下を視て、集止す可きを觀るなり。賢者の禮を待ちて乃ち行き、^{めく}翔りて而る後に集るに喩う)」。

④靈囿止歌白鳥之什：題目の前後の文に「詩云、經始靈臺、經之營之。庶民攻之、不日成之。經始勿亟、庶民子來。王在靈囿、麀鹿攸伏。麀鹿濯濯、白鳥鶴鶴。王在靈沼、於物魚躍(詩(『詩經』大雅・靈臺)に云う、靈臺を經始(靈臺^{はか}を度り立てる)し、之を經(測量)し之を營(しるしをたてる)す。庶民 之を^{おさ}攻め、日ならずして之を成す。經始 亟やかにする勿きも、庶民 子のごとく^{きた}來る。王 靈囿(動物を放し飼いにしている囿)に在り、^{ゆうろく}麀鹿の^{ところ}伏す攸。麀鹿 濯濯たり、白鳥 鶴鶴たり。王 靈沼に在り、^{あみ}於^{うおど}物ちて魚躍る、と)」。

議論を以て點染(文字を修飾する)と爲す。纖巧(こじんまりとして弱弱しい)に落ち

ず（『芹宮新譜』上巻・「點染映合」条・二十七葉）。

◎「天油然作雲沛然下雨」（『孟子』梁惠王上）の起に云う；

嗣君初立、而萬物懷新方、將望其布陰雨之膏、而慰雲雷之望、特未敢必大澤之何時降耳、然百姓望君如望歲、而農夫望歲亦如望君、意中之所期、何必不得之意外、臣與王言、既稿之苗

（嗣君 初めて立ち、萬物 新方を懷く、將に其の陰雨の膏^{うろお}しを布くを望み、而して雲雷の望みを慰さむ、特に未だ敢て大澤之何れの時に降るかを必〔要〕とせざるのみ、然れども百姓 君を望むこと望歲（豊作を望む）の如し、而して農夫 望歲すること亦た君を望むが如し、意中の期する所、何ぞ必ずしも之を意外に得ざらんや、臣（孟子）と王（梁の襄王）との言、既に「稿^{かれ}の苗」なり）

①陰雨：『詩經』曹風・下泉に「芄芄黍苗、陰雨膏之（芄^{ぼうぼう}たる黍苗、陰雨^{しよびよう}之を膏^{うろお}す）」。

②雲雷之望：『易經』屯卦は上卦が「坎（雲）」で下卦が「震（雷）」であり、「屯」の象傳に「屯剛柔始交而難生、動乎險中、大亨貞。雷雨之動滿盈、天造草昧、宜建侯而不寧（屯は剛柔始めて交わり難生ず、大いに亨^{とお}りて貞。雷雨の動くこと滿ち盈つ、天造 草昧なり、宜しく侯^{きみ}を建つべくして寧^{やす}しとせず）」。

③大澤：『禮記』祭統に「祭者、澤之大者也、是故上有大澤、則惠必及下（祭は、澤の大なる者なり、是の故^{かみ}に上に大澤有れば、則ち惠 必ず下^{しも}に及ぶ）」。

④稿之苗：題目から截去された上文と題目に「……王知夫苗乎、七八月之間、旱則苗稿矣、天油然作雲、沛然下雨、則苗淳然興之矣（王（梁の襄王） 夫^かの苗^{なえ}を知るか、七八月の間、旱^{ひでり}なれば、則ち苗^{かれ}稿^{おこ}る、天 油然と雲^{おこ}を作し、沛然と雨を下せば、則ち苗 淳然として興^{おこ}きん）……」。

點染（文字を修飾する）を以て明擒と爲す。亦た是れ一法なり（『芹宮新譜』上巻・「點染映合」条・二十七葉）。

◎「挾泰山以超北海」（『孟子』梁惠王上）の起に云う；

且齊之爲國也、襟山帶海號稱天府、而王曾無所挾以超諸侯、王不幾負此泱泱大風之國也哉、然能保民而王、則何不能之有而其形則有可逆睹者、請得爲王言之

（且^{そも}も齊の國爲るや、山を襟とし海を帶として天府（肥沃で物産の豊かな地）と號稱す、而して王 曾て挾^{わきばさ}み以て諸侯を超ゆる所無し、王 此の泱泱たる大風の國に負くに幾からざんや、然れども能く「民^{やす}を保んじて王た」れば、則ち何の能わざること之れ有らん、而して其の形は則ち逆睹す可き者有り、請う王の爲^{ため}に之を言うを得ん）

①挾以超諸侯：題目^{とびあが}の朱注に「挾、以腋持物也。超、躍而過也（挾は、腋を以て物を持つなり。超は、躍りて過ぐるなり）」。

②泱泱大風：『左傳』襄公二十九年に「爲之歌齊。曰美哉、泱泱乎、大風也哉、表東海者其大公乎（之

が爲に齊〔風の詩〕を歌う。〔呉の季札が〕曰く、美なる哉、泱泱（気宇宏大）として、大風なり、東海に表たりし者は、其れ大公（太公望）なるか）」。

- ③保民而王：題目から截去された上文に「……曰保民而王莫之能禦也〔孟子〕曰く、民を保んじて王たること、之を能く禦むる莫きなり）……」とあり、朱注には、「保、愛護也（保とは、愛しみ護るなり）」。

題中の字面は俱に題外より映出す。游戲題は正に宜しく此の如くすべし（『芹宮新譜』上巻・「點染映合」条・二十七葉～二十八葉）。

◎「醫來」（『孟子』公孫丑下）の起に云う；

昔孟子挾針砭之方而治王膏肓之疾、天下之良醫也、乃王不自治、而反欲治孟子之疾、嗟乎孟子果何疾哉、彼貿貿而來何爲者

（昔孟子 針砭の方（政策）を挟み王（齊の宣王）の膏肓の疾を治さんとす、天下の良醫なり、乃ち王（齊の宣王） 自から治さず、而して反って孟子の疾を治さんと欲す、嗟乎、孟子 果して何の疾なるや、彼の貿貿として来るは何を爲す者ならんや）

- ①貿貿然來：『禮記』檀弓下に「有餓者蒙袂輯屨貿貿然來（餓える者の袂を蒙り屨を輯めて貿貿然として来る有り）」とあり、鄭注に「貿貿は、明らかならざるの貌なり」。

正意に従いて本題に映合（照らして呼応する）す。亦た大方（基本的な方法）を見る（『芹宮新譜』上巻・「點染映合」条・二十八葉）。

◎「今也南蠻貊舌之人」（『孟子』滕文公上）の起に云う；

昔周公輔相、而重譯來朝、舉凡冠帶不及・語言不通之國亦莫不懷好音、而切西歸之慕、則荒服之遠亦王者所不棄、然遠人慕義、則進之、而據其俗以考其人、則有一啟口而令人厭者、彼許行固何人乎

（昔周公 輔相たりて、譯を重ねて來朝す、舉凡の冠帶（教化）の及ばざる・語言の通ぜざるの國も亦た「好音（好いことば）を懷ら」ざるは莫し、而して切に西に歸らんとするの慕あれば則ち荒服（僻遠の地区）の遠きも亦た王者の棄てざる所なり、然らば遠人 義を慕えば、則ち之を進むなり、而れども其の俗に據りて以て其の人を考えれば、則ち一たび口を啟きて人をして厭わしむる者（南蠻貊舌の人である許行）有り、彼の許行 固より何人ならんや）

- ①不懷好音：『詩經』檜風・匪風に「誰將西歸、懷之好音（誰か將に西に歸らんとす、之に好音を懷らん）」。

- ②西歸：①参照。『詩集傳』で朱子は「西歸、歸于周也（西歸とは、周に歸るなり）」と注している。

- ③荒服之遠：五服の一。『書經』禹貢に「〔天下五百里のなかの王都から最も外側の〕五百里は荒服なり」。

- ④王者所不棄：『論語』微子に「周公謂魯公曰、君子不施其親、不使大臣怨乎不以、故舊無大故、則不棄也、無求備於一人（周公 魯公に謂いて曰く、君子 其の親を施^{しん}すてず、大臣をして以^{もち}いられざるを怨ましめず、故舊 大故無ければ、則ち棄てず、備わらんことを一人に求むる無し）」。
- ⑤遠人慕義：『論語』季氏に「……故遠人不服、則脩文德以來之、既來之則安之（故に遠人服せざれば則ち文德を脩め以て之を來^{きた}す、既に之を來せば則ち之を安んず）……」。
- （『芹宮新譜』上卷・「點染映合」条・二十八葉）

この「點染映合」法の有用性について、鄭一鵬は最後に次のように述べる。

以上、[[「點染映合」法について] 偶々数題を拈^{つまみと}りて指點（論評）を畧作するに過ぎず。其の法 原より此に止まらず。大約、淡にして枯なる可からず、濃にして俗なる可からず、設色（色付けする）するに采（飾り立てる）なる可からず、布景（配置）するに泛（平凡 / 散漫）なる可からず。字は來歴有るを要し、句は杜撰ならざるを要す、此の法は、小題に最も利あり。而して近日尤も尚お胭脂（べに）を買いて牡丹を画くもの多し、亦た逢持する者の必ず講ずる所なり（『芹宮新譜』上卷・「點染映合」条・二十八葉～二十九葉）。

以上、「點染映合」法についていくつかの例題をとりだして論評を簡単に加えたにすぎない。だが、この「點染映合」法は、ここに例示したものだけにとどまらない。だいたい、薄くして枯れすぎではいけない。濃くして俗になってはいけない。色付けするにしても飾り立ててはいけない。文字の配置も散漫ではいけない。文字は典拠が必要であり、句は杜撰ではいけない。この「點染映合」法は、小題の作成において最も有効である。しかし最近は、必要以上に飾り立てているものが多い。この「點染映合」法を利用する者は必ず注意しておかなければならないところである、という。

（つづく）

The Beginning Discussion Section of the Eight-Legged Essay

Kunio TAKINO

Abstract

This essay is an exploration of the method for writing the “Beginning Discussion (qijiang)” section of an “eight-legged essay”. The “Beginning Discussion ” is also known as the “Small Discussion (xiaojiang)”. It follows on from the “Breaking Open the Topic (poti)” and “Receiving the Topic (chengti)” sections. The first requirement of the Beginning Discussion section is to “speak on behalf of the sages”. As such, it is necessary first to provide a general explanation of how the rest of the essay will develop. Because of this, the method of addressing the topic in the Beginning Discussion is extremely complex. This essay provides a detailed explanation of both the form and the method of addressing the topic in the Beginning Discussion.